

ワークショップ

「アジアの森林保護政策・制度による人々の暮らしへの影響と対応」

市川昌広・内藤大輔

●趣旨：

本ワークショップでは、日本や東南アジアでみられる森林保護制度が、森林やその周辺で森林を利用しながら暮らしている人々(森に暮らす人々)にどのような影響を与えているのかを報告し、森林保護と彼らの森林利用がどのように両立できるのかを考える。

世界の森林は依然として急速に劣化・減少している。地球温暖化や生物多様性の減少といった地球環境問題が声高に叫ばれる中、国際的には森林は炭素貯留や生物の生息地としての役割が認識されるようになった。たとえば、気候変動枠組条約の締約国会議では、二酸化炭素削減という御旗の下、少しでも自国に有利な条件を取り付けるために表舞台や水面下でさまざまな駆け引きが演じられている。その結果が国際レベルあるいは国レベルにおいて、環境保護の政策・制度となり現場へ降りていく。

東アジアから東南アジアにかけては、森林が切れ目なく分布しており、そこに森に暮らす人々がみられる。彼らと森の間には、物質的・経済的なつながりばかりでなく、信仰や世界観の形成など文化的にも強いつながりがある。その森林が商業伐採、農業開発、ダム建設などさまざまな開発によって消失し、そこに暮らす人々が大きな影響を受けてきたことはマスコミなどによってたびたび報告されてきた。しかし、開発だけが彼らの暮らしに影響を与えてきたのではない。環境保護のための政策や制度も、ときに彼らの森林利用を大きく規制し、彼らの暮らしに打撃を与える。

二酸化炭素の削減や生物多様性の保全は、国や国際的なレベルにおいて重要な課題であり、そのための森林保護は欠かせないだろう。しかし、そのためにその森林に暮らす人々の生活が損なわれていいはずがない。ここに本ワークショップが検討するジレンマがある。

森林保護の制度は数多くみられる。ワークショップでは、最近の新しい動向に着目しつつ、いくつかの制度を取り上げる。各々の制度は、国や地域ごとの社会的、文化的、生態的な環境を背景として、その効用や森に暮らす人々への影響は異なってくる。そこで各発表者は、ひとつの地域に話題を限定し、地域性を十分考慮した議論をする。

ワークショップでは、森林保護制度を森に暮らす人々からの「距離」により3つに分けて検討を試みる。すなわち、国際的な制度、国による制度および住民参加型の制度である。国際的な制度は、もっとも森にすむ人々から「距離」があり、彼らの森林利用への配慮は小さくなる可能性がある。逆に参加型の制度は、配慮はいき届きやすいはずであるが、実際にはどうであろうか。各発表者が示す事例を通じて、森林保護と森に暮らす人々の森林利用のジレンマをどのように解決していくか、今後に向けてのヒントをさぐる。

●日時：2008年12月26日9時から27日13時まで

●場所：総合地球環境学研究所・講演室

●プログラム

12月26日(金)

I. 9:00-9:20 本ワークショップの趣旨 市川・内藤

II. 国際的な森林保護制度と森に暮らす人々(司会:葉山アツコ)

9:20-10:00 湯本貴和(地球研)「地元の世界自然遺産をもつということ:屋久島を事例にして」

10:00-10:40 小泉都(地球研)、服部志帆(京都大学 ASAFAS)「生物多様性の保全制度を狩猟採集民の生活・文化の尊重につなげていくために」

10:40-11:20 内藤大輔(日本学術振興会/地球研)「マレーシアにおける森林認証制度による地域住民への影響」

11:20-12:00 原田一宏(兵庫県立大)「インドネシアにおける森林認証制度-地域住民による森林管理への適応の現状と課題」

12:00-12:30 セッション討論

12:30-14:00 昼食

III. 国による森林保護制度と森に暮らす人々(司会:市川昌広)

14:00-14:40 東智美(メコン・ウォッチ/一橋大)「ラオス北部における土地森林委譲事業による焼畑民の暮らしへの影響」

14:40-15:20 東城文柄(地球研)「バングラデッシュの住民運動が示したコミュニティ参加型森林保護の問題点」

15:20-16:00 増田和也(京大)「政府が植える木々、地域が守る森:インドネシアにおける産業造林と地域社会」

16:00-17:00 セッション討論・全体討論

18:00- 懇親会

12月27日(土)

IV. 参加型森林保護制度と森に暮らす人々(司会:東城文柄)

9:00-9:40 葉山アツコ(久留米大)「生活論理と環境倫理をつなぐことはできるのか:フィリピンの森林政策から考える」

9:40-10:20 生方史数(京大)「二元論を超えて:タイの林業・森林保全の現場から考える」

10:20-11:00 島上宗子(京大)「インドネシアにおけるコミュニティ・フォレストリー政策の展開と媒介者の役割」

11:00-11:40 阿部健一(地球研)「グローバル時代の森林:政策・森林認証制度・つながり」

V. 11:40-12:40 総合討論 コメンテーター:生方史数(京大)

発表の要旨（発表順）

湯本貴和（地球研）「地元の世界自然遺産をもつということ」

現在、日本では多くの自治体が、地域の自然（あるいは景観）保護と地元の経済振興を両立させる切り札として、世界遺産への登録に多大な労力を費やしている。はたして、本当に目論みどおりになるのであろうか？日本の白神山地と屋久島などの世界自然遺産を例にして、地元の世界自然遺産をもつことで地域の人々の生活がどう変わり、どう変わらないのか、そしてそれはなぜなのかを考える。

小泉都(地球研)、服部志帆（京都大学 ASAFAS）：「生物多様性の保全制度を狩猟採集民の生活・文化の尊重につなげていくために」

生物多様性条約では、生物資源の保全や利用において住民の知識や慣行を尊重することが明示されている。しかし現実には、住民の権利が十分に守られているとは言い難い状況がある。今後さらに法整備が進めていくであろうが、そのためには住民の社会システムや知識のあり方をよく理解する必要がある。土地、もの、知識に対する所有意識が先進国や都市生活者と大きく異なるボルネオ島の狩猟採集民を取り上げて、具体的に問題点を検討していく。

内藤大輔（日本学術振興会/地球研）：「マレーシアにおける森林認証制度による地域住民への影響」

森林管理協議会（FSC）は、世界共通の基準を作り、持続的な森林管理を評価、認定し、その認証材の購入を促すことによって、持続的な森林管理普及の促進を目指している。このような市場メカニズムを利用したグローバルな環境制度が導入されることにより、マレーシア・サバ州の森に暮らす人々がどのような影響を受けてきたのかを明らかにする。

原田一宏（兵庫県立大）：「インドネシアにおける森林認証制度－地域住民による森林管理への適応と課題」

インドネシアでは、違法伐採の対策の手段のひとつとして森林認証制度が導入され、国際版の FSC と国内版の LEI の 2 種類がみられる。地域住民が管理する森林に対する認証制度は、地域住民のエンパワーメントや経済向上にも寄与すると期待されている。本報告では、インドネシアにおける森林認証制度導入の背景や歴史的変遷について述べるとともに、SFC と LEI の導入事例を比較しつつ、森林認証が森に暮らす人々元来の森林管理にどのように受け入れられたかについて説明し、課題や今後の展望について論じる。

東智美（メコン・ウォッチ／一橋大）：「ラオス北部における土地・森林委譲事業が焼畑民の暮らしに与えた影響」

ラオスでは村落内の森林の利用区分などを行う「土地・森林委譲事業」が全国規模で実施されてきた。本来、森林回復や貧困削減を目的とする政策だが、住民の森林利用にそぐ

わない形で実施され、森林破壊や住民の生計手段の喪失につながるケースが目立つ。同事業がラオス北部の焼畑民の暮らしに及ぼした影響と今後の展望を述べる。

東城文柄(地球研)：「バングラデッシュの住民運動が示したコミュニティ参加型森林保護の問題点」

バングラデッシュにおける住民運動の事例から、森林管理への住民参加を進めていく必要性を述べる。住民参加では、「ローカル」や「コミュニティ」は均一なものとして認識されがちである。しかし、偏りのない住民参加を実現しなければ実効的な森林保全は達成しがたいことを示す。

増田和也(京都大学)：「政府が植える木々、地域が守る森：インドネシアにおける産業造林と地域社会」

インドネシアでは、緑化の名目で政府や企業が造林事業進めてきた。一方、地域社会には慣習的に守られてきた森がある。こうした森が政府の造林対象区域に含まれると、事業のために伐採の対象となることがある。本発表では、森林観をめぐる政府側と地域社会のずれを示すとともに、政府側と住民の間に立つ慣習リーダーの対応に注目し、地域社会を一枚岩的にはとらえきれないことを述べる。

葉山アツコ(久留米大学)：「生活論理と環境倫理をつなぐことはできるのか：フィリピンの森林政策から考える」

フィリピンの山地は、制度的には国家が所有・管理する空間であるが、実質的には多くの住民が私的に利用する私的空間である。住民福祉の視点を取り入れた政策、事業が導入されて久しいが、うまく機能しているとは言い難い。山地で問題になるのは、地元住民の生活論理と政府が考える環境倫理とが結びつかないということである。その原因として府職員の職業倫理の欠如や村落共同体の組織原理に原因があるのではないかと考えている。本報告では、この点を議論したい。

生方史数(京大東南ア研)：「二元論を超えて：タイの林業・森林保全の現場から考える」

熱帯の林業・森林問題を考えるとき、国家や企業対住民という二元論の構図を暗黙のうちに想定する見方が依然として多い。しかし、森林資源が希少化し、農村が市場経済に統合されるにつれ、そのような見方の妥当性は低くなってきている。本報告では、タイの森林セクターにおける生産と保全の変遷を事例として、「第三の傾向」がどのように生まれてきたのかを論じる。そして、地域的な相違や市場志向のアプローチなどの政策動向も踏まえながら、東南アジア地域における森林・林業問題の今後を考える際の代替的な構図を提示したい。

島上宗子(京都大学)：「インドネシアにおけるコミュニティ・フォレストリー政策の展開と媒介者の役割」

「森を守り、人々を豊かに」をスローガンに、インドネシアはコミュニティ・フォレストリー政策が開始された。しかし、朝令暮改する政策に現場は混乱し、期待された成果をあげられているとはいえない。そうした中、村・地方のイニシアティブにより進展しつつある先進的な取り組みを、媒介者の役割に注目しながら検討し、その可能性と課題を考える。

阿部健一(地球研)：「グローバル時代の森林：政策・森林認証制度・つながり」

とりあえず森林を「内」と「外」に分けてみよう。森林の内側には、森林に経済的・文化的・歴史的に強く依存している人がいる。しばしば「森の人」などと呼ばれ、今回事例に取り上げる半島マレーシアでは「オラン・アスリ」と称される。外の人とは、直接あるいは日常的には森林とはかかわっていない人々である。「我々」もそこに含まれる。

とりあえず、両者は森林を守ろうとしている、としよう。とりあえず、というのは、内の人の中には、機会があれば森から離れ、より良い生活をしたいと思っていて、そうなれば森への関心は薄れてしまうだろうし、森の外の人の中には、現実に森を守るためには何ができるのかわからないまま、気持ちを直接行動に移せずにいるからである。

今回議論したいのは、この内と外を「つなげる」さまざまな試みについてである。政策や制度を越えて内と外をつなぐことで、最初の「とりあえず」は意味がなくなり、次の「とりあえず」は、仮定から現実のものになるのではないかと考えている。